〈立命館大学日本文学専攻・日本文学会年表〉

○一九一三（大二）・一二
財団法人立命館設立、大学部を「私立立命館大学」と改称。
○一九一八（大七）・二
「立命館大学」と改称。
○一九二二（大一一）・六
旧制大学令に基づく「立命館大学」の設立が認可。
○一九二三（大一二）・四
大学予科を開設。
○一九二七（昭二）・四
専門学部に文学科国語漢文科を新設。
○一九三六（昭一一）・三
国語科中等教員無試験検定の申請が認可。
○一九四一（昭一六）・一〇
従来の法経学部の単科大学を改組し、法文学部の単科大学へ。文学科は国史・国文・地理・漢文の四学科、二部のみ設置。
○一九四四（昭一九）・四
戦時非常措置に関する文部省通達によって、大学ならびに専門学部における諸学科を統合、法・経・文・理・工の五学科を置く「立命館専門学校」に編成替え。また、文学部（一部）を新設。
○一九四五（昭二〇）・一
文学科全体を「東亜文学科」と改称。
○一九四五（昭二〇）・一〇
敗戦を契機に、東亜文学科は「文学科」と改称。
○一九四六（昭二一）・四
「立命館大学」を復活し、授業を開始。
○一九四七（昭二二）・二
大学文学科一部（昼間部）開設を申請し、五月一日より開講。哲学・国文・漢文・史学・地理の五学科を設置。
○一九四八（昭二三）・一
法文学部を解消し、従来の学科を学部に拡充、法学・経済学・文学の三学部を置く旧制総合大学として認可。
○一九四八（昭二三）・二
新制立命館大学設立が認可。国文学科から文学科日本文学専攻となる。
○一九四九（昭二四）・四
河原町通り東側の地に文学部木造校舎竣工。
○一九五〇（昭二五）・四
短期大学部開設。
○一九五二（昭二七）・四
大学院修士課程に日本文学専攻設置。
○一九五三（昭二八）・三
立命館専門学校廃止。
○一九五三（昭二八）・七
第一回日本文学夏期講座を開催（一九六四年、第十二回まで）。
○一九五四（昭二九）・三
短期大学部廃止。
○一九五四（昭二九）・六
立命館大学日本文学会創立。結成総会に数十名出席。清水泰教授還暦記念学術講演

会。

○一九五四（昭二九）・七

『論究日本文学』創刊号を「清水泰教授還暦記念号」として刊行。年三回の刊行を計画（実際には、財政難のため、一九六〇年までは年二回の刊行であった）。

○一九五四（昭二九）・一〇

戦前本学で恒例的に行われていた「万葉旅行」を本学会主催として復活。第一回は明日香方面、参加者約三十名。

○一九五五（昭三〇）・五

第二回総会で、活動計画として『論究日本文学』の刊行・夏期講座・研究会（毎月一回）・万葉旅行が提案され、承認。

○一九五五（昭三〇）・一一

『論究日本文学』第四号編集後記は、年三回刊行のためには会の財政が逼迫していることを伝える。

○一九五六（昭三一）・一〇

これまでの万葉旅行を広く「文学旅行」として実施。南紀方面、参加者は五十余名。

○一九五七（昭三二）・四

広小路の地に文学部新校舎「清心館」完成・移転。

○一九五七（昭三二）・一一

『論究日本文学』第七号を「後藤丹治博士還暦記念号」として刊行。

○一九五九（昭三四）・九

『論究日本文学』第十一号を「清水泰先生退職記念特集号」として刊行。

○一九六〇（昭三五）・一一

このころ、定例研究会を「日本文学談話会」と改称。

○一九六一（昭三六）・三

『論究日本文学』第十四号刊行。これ以降二年間は年三回刊行。

○一九六三（昭三八）・四

日本文学専攻の二クラス制を実施。

○一九六三（昭三八）・九

『論究日本文学』第二十一号を「後藤丹治博士追悼号」として刊行。

○一九六四（昭三九）・一

『論究日本文学』第二十二号を「宮嶋弘教授追悼号」として刊行。

○一九六四（昭三九）・九

『論究日本文学』第二十三号を「清水泰先生古稀祝賀記念特集号」として刊行。

○一九六五（昭四〇）・八

夏期講座休止に代わる新たな催しとして、第一回「国語教育ゼミナール」を開催。参加者三十四名。

○一九六五（昭四〇）・一〇

このころから、夏期の文学旅行以外に、秋季研究旅行が会の活動の一つとなる。

○一九六六（昭四一）・一

『論究日本文学』第二十六号刊行。これ以降三年間は年三回刊行。

○一九六八（昭四三）・六

第十五回大会。この翌年以降一九七二年一二月まで大学紛争のため、大会は開催されず。

○一九六九（昭四四）・四

『論究日本文学』第三十五号刊行。これ以降一九七三年三月まで刊行休止。

○一九七一（昭四六）・一

学生部会臨時総会で、本学会からの脱退決議。

○一九七二（昭四七）・六

学生部会臨時総会で、本学会への復帰決

議。

○一九七二（昭四七）・一二

第十六回大会。総会で、学生部会からの学会復帰表明、活動計画として『論究日本文学』の刊行・日本文学談話会の運営について提案され、承認。

○一九七三（昭四八）・三

『論究日本文学』第三十六号刊行。

○一九七三（昭四八）・七

第十七回大会。三年間にわたる学部の新入生の無加入と任意加入制の徹底による会員数の減少のため、会の財政は悪化。『論究日本文学』は年一回の刊行へ。

○一九七四（昭四九）・六

第十八回大会。活動計画として、文学旅行の復活が提案され、承認。

○一九七六（昭五一）・六

第二十回大会。活動計画として、国語教育ゼミナールが提案され、承認。

○一九七八（昭五三）・四

文学部、衣笠キャンパスの新清心館に移転。

○一九八〇（昭五五）・四

桜楓社より『国崎望久太郎博士古稀記念日本文学の重層性』刊行。

○一九八三（昭五八）・一二

和泉書院より『和田繁二郎博士古稀記念日本文学　伝統と近代』刊行。

○一九九一（平三）・六

第三十五回大会。会則の整備改正・創立四十周年記念事業（募金活動・『論究日本文学』の年二回刊行など）が提案され、承認。

○一九九一（平三）・一一

『論究日本文学』第五十五号刊行。創立四十周年記念事業の一環として、これ以降年二回の刊行に踏み切る。

○一九九二（平四）・五

『論究日本文学』第五十六号刊行。「森本修先生追悼」の小特集を組む。

○一九九四（平六）・六

第三十八回大会。創立四十周年記念特別大会の開催が提案され、承認。

○一九九四（平六）・一一

創立四十周年記念特別大会「立命館大学日本文学草創期の人々」を開催。

（真下厚　編）